

読みの統一と勸化

『観音経略図解』における同字句・構文の読み方

今井 亨

要旨

大衆勸化を念頭に置いて訓読に和語を積極的に取り入れた勸化本に、山田意斎著『観音経和訓図会』と中村経年著『観音経略図解』の二種がある。略図解は、和訓図会を参照して作成されたものと見られる。分かりやすさ親しみやすさの工夫として、略図解の読みはいかに整備されているのか。比較訓読法をもとにして、和訓図会の意識例との異同、観音経に複数回（三回以上）出現する一一種の字句、繰り返しされる三種の構文に着目して、両本の読みの統一度を比べた。調査の結果、略図解の読みの特徴は、熟字を単字単位に分解して読む、当代の定訓によって読む、組織的に訓を統一して読む、字句の訓に比べて文法的な読み添え表の統一度は低い、ことが明らかとなった。その基本方針は「できるかぎり和語化する」といえるが、略図解の「和語化」とは逐字的に定訓で読むことであって、積極的に意識を創り出すことではない。

和訓図会は、訓が多彩で意識や口語的な表現を取り入れていて柔軟で関連である。一方、略図解は、定訓を主にして逐字的に読みを整備している組織的である。それぞれ違った方向性で言葉の選択を工夫した勸化訓読資料といえる。

キーワード 松亭中村経年 観音経和訓図会 比較訓読法 定訓

仮名書き法華経

一 分かりやすさの工夫

江戸時代末期に一般庶民の信仰・教養の欲求に沿うように平仮名・絵入というかたちで作られた経典注釈書は、従来「図会もの」「通俗仏書」「勸化本」などとして主に日本文学の世界で知られてきた。先にその一つである山田意斎著『観音経和訓図会』（嘉永二年刊）を取り上げて、大衆への配慮がそうした体裁面だけでなく、経文の訓読に和語を積極的に取り入れて字句を柔軟に解釈するという言語面にまで及んでいることを明らかにした。定訓を用いて馴染みの和語で読んだり同じ字句は同じ読みとなるように一律に読んだりすれば、親しみやすくもあり、読みに安心感をもたらすことにもなる。その反面、規格化された読みにこだわることで、個別的な意味は捨象され文意の理解に結びつきにくくなる可能性もある。定訓を活用して一定の〈字―訓〉対応の範囲内で処理しつつ、ときに個々の文脈に即して大胆に案出する、そのさじ加減こそが大衆への配慮の妙となる。

このことを考える資料として本稿では、和訓図会と同じく大衆勸化を念頭に置いて和語を積極的に取り入れた、中村経年著『観音経略図解』に注目する。その序文には、執筆の動機が次のように述べられている。

然れども村童漁父また婦女室女の輩は、文字に疎きも多くしてかほど愛たき経文を観るとも心に会得せず、聴とも一時の戯論と思ひて、信ずる心なき時は、功德も益のなきに似たり。然れば文章を和解で、画を加へなば、自然童蒙稚女の眼にも触て、彼大徳の十が一だも識るに足らむと老婆心なる書肆が請に任せつつ、拙なき筆を顧ず、夫が語釈をなすものから

とあるのをはじめ、

ここを以て普門品は、最第一なる経王のうちのまた最勝といふべきのみ。故にその无量无边、実に限りなき功德のほどを国字書

にして、解し易くし、一切の衆生をしてその信を益しめんとす。

(一裏)

然りとはいへども、観世音菩薩かかると大功徳の在ますよしを弁へず、ただ微妙菩薩とのみ心得てあらんは、无下に拙なく朽惜き所為なれば、いささか聞はつる随意随意を書つけて、遠境田家の児童に示さんとす。敢て大方の君子の嗤を愧といへども、是また余が老婆心のみ。(四十七表)

などと、一般庶民に向けて「老婆心」を起こした旨がたびたび表明されている。

著者の中村経年(松亭金水)は、為永春水の後に活躍した人情本末期の代表的作家であるが、『日蓮聖人一代図会』(葛飾為斎画図、安政五年刻成)や『松亭身延紀行』を著したり「随筆や戯作といった作品に『法華経』の引用が多く、特に日蓮に対しては肯定的な言説を述べ」たりもしていることから、日蓮宗信徒として「『法華経』に対して特別な関心を持っている」たと察せられている。

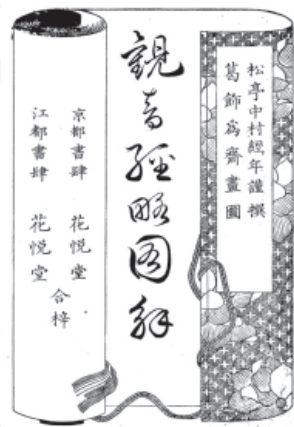
このように、法華経を厚く信仰していた戯作者の手になる勸化本において、言葉の選択はいかに工夫されているのだろうか。

二 研究資料——中村経年著『観音経略図解』

『観音経略図解』全一冊は、見返(黄料紙)と奥付に次のようにある一書をいうが、じつは書名・開板だけからしても、何やら複雑な成立・展開をうかがわせる文献なのである。

まず書名に関して、原装と見られる表紙の題簽には「観音経略図解全」とあり、その角書に「早読絵抄」とある。内題は、見返題「観音経略図解」に続いて、自序「観音経略図解叙」、巻首には「観音経略図解」(二表)、巻尾には「観音経早読絵抄 終」(五十一表)、版心には「観

【図版1】表紙見返・奥付



東都	松亭中村経年謹撰
東都	葛飾 為斎畫圖
彫工	宮田六左衛門
原板元文四年己未正月出版	
文久二年壬戌九月改正再刻	
京都	須原屋平左衛門
京都	須原屋平助
東都	發兌

【図版2】明治版奥付

東都	松亭中村経年謹撰
東都	葛飾 北齊畫圖
彫工	宮田六左衛門
原板元文四年己未正月出版	明治二十四年
文久二年壬戌九月改正再刻	十月十日補刻
京都	須原屋平左衛門
京都	須原屋平助
東都	發兌

音経略図解」とそれぞれあって、巻尾題のみが異なる。

次に開板に関して、自序末に年時「于時嘉永辛亥季夏」(嘉永四年・一八五一年)、奥付(五十一裏)には「原板元文四年己未正月出版、文久二年壬戌九月改正再刻」(一七三九年、一八六二年)

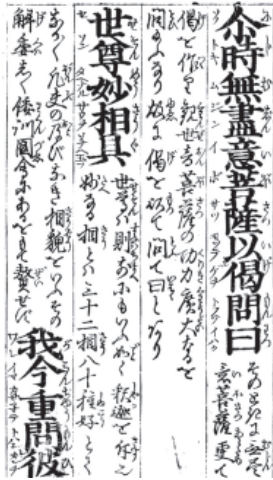
とある。この元文四年の原板に関して、たしかに、「元文四己未年正月吉日」、「書林 吉文字屋市兵衛・同幸重郎、板行」という奥付をもつ『観音経早読絵抄』という文献が存在し、略図解はこの「『観音経早読絵抄』(元文四年)を金水が全面的にリライトし、挿絵を改変増補した解題再刻本であると考えられる」ともされるのだが、略図解の訓読・注釈に関して早読絵抄との類縁性を認めることは難しい。

また底本以外にも、奥付に「明治二十四年十月十日補

刻」と加えられた版本もある。

この明治補刻版では、「東都 葛飾北斎画図」とあって、画図を為斎ではなく北斎とする「改竄」も見られる。書名に関しては、外題「観音経和訓図会」、自序「観音経和訓図会叙」、巻首「観音経和訓図会」、巻尾「観音経和訓図会終」、版心「観音経略図解」とあって、『観音経和訓図会』という書名に改めて刊行されたと見てよからう。ここに至って、同時期にもなお刊行されていた山田意斎著の和訓図会と書名のうえで重なることになる。

【図版3 本文（三十八丁表より）】



略図解の内部の構成

は、界を引いて、経文句を区切って掲げ、その下に解説を二行に割って注すかたちで記す。経文句の右には各字の直読を平仮名で示し、左には各字句の訓読を片仮名で逐一示す。ただし、訓読は延

書きにはせず返点に従うかたちにしてある。その訓読は、一見して和語が豊富で、早読絵抄よりもむしろ和訓図会との類似を匂わせる。後代に書名が同じくされたのも、訓読態度に通じるところが認められたためかもしれない。

かくして、先行する早読絵抄・和訓図会という異なる二本に跨がるような来歴をもつ略図解の性格を明らかにするには、この二本との関係を視野に入れることが不可欠となる。

三 山田意斎著『観音経和訓図会』との関係

略図解が先に刊行されていた山田意斎著の和訓図会を参照していたことは、本文中の記述から明らかである。【枷鎖の難】を釈した本文には、次のようにある。

観音経和訓図会といふ書を閲するに、この件を説て、本文の如く罪有も罪無も斯の如しとのみいひ、景清のことももて皆悉断壊の功力空しからずと載たり。然れども元景清罪あつて禁錮せられたる者にあらず。彼は平家恩顧の侍にて、武勇に勝れたるが、時運傾きて主君の一門西海に亡び、衆みな潰走る。この時にあたつて仇を撃んことを図り、単身にして敵地に忍び入り、右幕府を窺ひ、事ならずしてここに及ぶ。尋常罪を犯して牢獄へ籠られ、または枷鎖、枷などかけらるるものと、年を同じうしていふべからず。実に景清は忠臣也、義士也。運命拙なくしてその志を得ず。竟に囚に就く。神明仏陀、これを憐み給はざらんや。彼が牢獄を免かれたる功力をもつて、いかなる罪人も信心すれば、斯の如く利益ありと思ふは誤のみならず、いささか世教の妨とならざることを得んや。（十四表）

和訓図会が景清の説話を載せて、「誠に皆悉断壊の功力空しからず。難有かりし御利生なり」（壹・廿五表）と評していることに対して、「いかなる罪人も信心すれば、斯の如く利益あり」という誤解を広めかねないと批判している。一方で、偈文句「世尊妙相具」を釈した本文には「その解委しく倭訓図会にあるをもて贅せず」（三十八表）とあって、詳細を委ねている。

このように、先行する類書として和訓図会の書名を掲げてその訓釈の是非にまで及んでいることから、略図解の執筆に和訓図会が深く影響していることはまちがいない。そして、和語を積極的に取り入れた略図

解の訓読法は、和訓図会に着想を得た可能性が高い。そもそも、意齋の遺著の一つである『扶桑皇統記図会』の序文（前編嘉永二年一〇月識、後編嘉永三年三月識）を経年が執筆していることから、経年にとって意齋は身近な存在だったのではあるまいか。

四 「比較訓読法」をもとにした考察（分析手順）

本稿では、読み手である一般庶民が理解しやすく親しみやすくなるような言葉の選択として、略図解の読みがいかに整備されているかという観点から考察する。そのために、先行類書である和訓図会の読みと比べることにする。調査・分析の進め方は次のとおりである。

- (1) 「比較訓読法」の手法を用いて、両本の読みを比べる。和訓図会は略図解の執筆に際して参考にされたと考えられるため、両本の読みの違いからは、当該の読みを選択した経年の意図が読み取れると期待される。
- (2) 採集された読みの異同を分類する。分類に関しては、先学による「比較の観点」を参考にする⁷⁾。その結果、大きく次のような異同を得た。
 - 音訓に関する違い——漢語・和語、別訓、別音、品詞
 - 接続に関する違い——接続表現、活用形
 - 読添に関する違い——助動詞、助詞、敬語、形式名詞
 - 再読や呼応に関する違い
 - 返読位置に関する違い
- (3) 分類した異同例を参考にし、同一の字句および構文の読みについて両本の読みの統一度を比べる。漢訳仏典である古典中国語を訓読というかたちで日本語に訳すには、音訓といった字自体の読みを工夫することと、接続や読添といった字句を膠着語化させる読み方を工夫することが専らの労となる⁸⁾。そこで、同一の字句および構文という二点に着目する。

和訓図会と略図解を一連のものと認めることで、両本の共通点とそれぞれの個性、和訓図会から略図解への影響の実態、略図解の成立背景などが明らかになると期待される。

五 略図解の訓読の姿勢・特徴

まず、前稿において和訓図会の創意が最も表れていると結論づけた意訳例（前稿Ⅱ「A2意訳を含むもの①和語（任意訓）、A2意訳を含むもの②原漢字を用いた漢語、B2意訳によるもの①訓読み・和語、B2意訳によるもの②漢語」）との異同をもとに、略図解の読みの特徴について探ってみる。

次に掲げたのは、和訓図会と略図解で読みが同じであったものである。

I 同じ読み

- 悪趣 [168。あしき^xたねーアシキ^xタネ] A2①
- 無量無辺 [67。はかり。なく^xかぎり。なしーハカリ^xナク^xカギリ^xナシ] A2①
- 慈心 [149じひの。こころージヒノココロ] A2②
- 饒益 [47。おほいにりやくすーオホイニリヤクス] A2②
- 妙智 [165。たへなるちゑータヘナルチエ] A2②
- 慧日 [172ちゑの。ひーチエノヒ] A2②
- 釈然 [153おのづからーオノツカラ] B2①
- 乃至 [17あるひはーアルヒハ] B2①
- 羅刹 [18おにーオニ] B2①
- 威神 [39すぐれたりースグレタリ] [12のりーノリ] B2①
- 依怙 [181ちちははーチチハハ] B2①
- 官処 [176やくしよーヤクシヨ] B2②

世尊「4しやかによらいーシヤカニヨライ」B2②
摩訶薩「39たいとうしんーダイダウシン」B2②

これらは、和訓図会を意識の巧みさが略図解でも認められた語例といえる。略図解の本文は、和訓図会に比べると字句の読み自体について言及した記述は少ないのだが、これら字句の訓釈を確認しよう。たとえば、【三毒解脱】をいう偈頌「164衆生被困厄 無量苦逼身 165観音妙智力 能救世間苦」に対して、訓読としては「モロモロノヒトワザハヒニクルシメラル ハカリナキクルシミニセマル クワンオンノタヘナルチエノチカラニテ ヨクヨノナカノクルシミヲスクフ」のように読み、本文には、「この文普通で解するときは、もろもろの人厄難に困しめられ、量りなき苦み身に逼りて、如何とも術なからんに、彼観世音を念ずれば、妙なる智の力を以て、よくその苦みを救ひ給ふと也。」(四十三裏)とあって、「〜となり」などのかたちで日常的な表現によって訓読をいっそう平易に言い換えた解説がある(以下これを「通用解釈(文)」)。こうした各解説文における表現を、原文字句・訓読と対応させて整理すると、次のようになる。

◎同字同訓で解説するもの

- 慈悲の心(四十裏・149「慈心」)
- その利益する所饒なり(十九表・47「饒益」)
- 妙なる智(四十三裏・165「妙智」)
- 威神力(六裏・12「威神力」)

◎異字同訓で解説するもの

- 測なく限なき(二十三表・67「無量无边」)
- 依怙は即父母といふ事也(四十六裏・181「依怙」)
- 斥所(四十五裏・176「官処」)
- 世尊とは釈迦如来を斥す(四裏・4「世尊」)

大道心(十七表・39「摩訶薩」)

◎異訓で解説するもの

- 慧き事日のごとく(四十五表・172「慧日」)
- 威神力(十六裏・39「威神力」)

◎音読みで解説するもの

- 悪趣(四十四表・168「悪趣」)
- 羅刹国(十一表・18「羅刹」)
- 威神力(六表・12「威神力」)

これら「本文」は経文句を解説するという性質上大衆にとって理解しやすいことが大切であるため、そこに用いる漢字の表記や語は一般的なものが多くなるのが当然であろう。いまそのような考え方に立って右の諸例を観察すると、訓読の読みのまま示したもの(「同訓」例)の方が多く、訓読においてすでに相当かみ砕いた表現が選択されていたことが確かめられる。ただし、「同訓」例でも多くは漢字表記を改変している。149「慈↓慈悲」と47「益↓利益」は、便宜上「同字同訓」例に分類しておいたが、二字漢語に直している。「異字同訓」例は、176「斥所」以外は今日の一般的な漢字表記と一致する表記形になっている。結局、意識による読みと表記をそのまま本文の解説にも取り入れているのは165「智」のみとなる。

「異訓」例の172「慧日」は、先行する経文句「無垢清浄光」と合わせて、「清浄光あるによつて、慧き事日のごとく、諸の闇をやぶる」(四十五表)と解説するが、「慧」を「たつとし」と読むのは定訓とは認めがたく、略図解の創見なのか解釈の出所が気になる。「音読み」例は、訓読で試みた意識(和語)を解説で音読み(漢語)に戻している字句である。18「羅刹」は【風難】をいう経文中の字句で、先行する経文句16「羅刹鬼国」の本文には「羅刹鬼国とておそろしき鬼の栖島」

(十表)と和語で通用解釈している。また、12 39「威神」は熟語「威神力」で、初出箇所12の本文には、「威神力とは観世音の功力広大なるゆゑに、天魔悪鬼といへども、是を犯すこと能はず。水火といへども、溺らし焼ことあたはず。実に神変不可測の徳あり。是を威神力といふ。」(六裏)と解説する。いずれも、「とて」「とは」とまず漢語のかたちを掲げて解説を進めていることから、仏教語として「羅刹」「威神力」という漢語がある程度定着していて、その存在を前提にしたものと考えられる。

次は、和訓図会と略図解で読みが異なっていたものである。

II 異なる読み

◎訓(逐字化)

具足 [134。そなへたらす。ソナへタル] A 2①
 慈眼 [182じひの。めージヒノ。マナコ] A 2②
 解脱 [9 18 28 36 たすかる。トケ。マヌカル] B 2①
 飄墮 [16 ふきながさしむ。タダヨヒ。オツ] B 2①
 困繞 [158 とりまく。マトヒカコム] B 2① [饒。マトフ] [困。饒。カコム]
 飲食 [58 しよくもつ。ノミ。クヒ] B 2②

これらは、略図解が単字に分解して各字を定訓で読んでいるものである。略図解は、和訓図会よりも逐字的に読む傾向が強いようである。

134「具足」の「足」と182「慈眼」の「眼」は、和訓図会でも逐字化されているが、略図解の方がより一般的な訓を採用している。和訓図会の「たらず」は「たる」に対する他動詞形のつもりであろうか。「眼」は、「め」と読むのは比較的新しく、中古以来「まなこ」と読まれてきた字である。訓の新古がちょうどこの異同に反映していると思われる。

◎訓(統一化)

衆生 [6 15 35。もろもろの。ひと。113。おほくの。ひと。モロモロノ。ヒト] A 2①
 衆生 [56 189もろびと。48よのひと。モロモノ。ヒト] B 2①
 種種 [168さまざま。113いろいろ。サマザマ] B 2①
 これらは、同一字句に対して、和訓図会が複数の読みを施すのに対して、略図解が一つの読みに統一しているものである。詳しくは次節で論じる。

「種種」は、定訓からは外れるが、伊京集(九六六)・天正十八年本(一三六四)・弘治二年本(二一五四)などの古本節用集に「さまざま」として載る。近世の早引万代節用集には「さまざま」はなく「いろいろ」(一203・「種種結構」)として載る。「種種」を和語に読むとすれば、「さまざま」が穏当な訓であったのだろう。

◎訓(創案)

端正 [53 うるはし。カタチ。タダシ] B 2①
 夜叉羅刹 [22 おに。オニドモ] B 2①
 臥具 [58 やぐ。ヨルモノ] B 2②

これらは、和訓図会とは異なる新たな読みを略図解が案出したと考えられるものである。

53「端正」は、一見「端」カクチ「正」タダシのような逐字的な読みに見えるが、一般的に「端」に「かたち」という訓は認めがたく、対応する本文にも「容貌端正して」(二十表)などとある。前稿に照らせば、読みの分類は「A 2 意識を含むもの①和語」で、その案出方式は「正」の定訓「ただし」から四字熟語「容貌端正」を導き出した「方式丁」に相当しよう。22「夜叉羅刹」は、鬼として「夜叉」と「羅刹」の二種が挙がっていることを考慮して「ども」を添えたものであろう。

「羅刹」は観音経中に全四箇所現れるが、略図解の読みは16「飄墮羅刹鬼国」(九裏) 18「皆得解脱羅刹之難」(十一表) 22「満中夜叉羅刹」(十二表) 156「或遇悪羅刹」(四十一表)とあり、前二者は不可算的に後二者は可算的に捉えて、細かに取意して「おに」と「おにども」に読み分けていると見られる。58「臥具」は、対応する本文では和訓図会の読みと一致する「夜具」(二十一裏)と通用解釈する。「よるもの」のほうが言葉としては古く、「やぐ」のほうが口語的である。

◎訓一音読み

無等等「189ひとしきしななきくららームトウトウ」A2①

阿耨多羅三藐三菩提心「189うへなきしなのくらむとなるまさしき

さとのり」○ころーアノクタラサンミヤクサンボダイシン」B2

①

十方「167よもージツハウ」B2①

須弥「144たかきやまーシユミノゴトシ」B2①

度脱「113たすくードダツス」B2①

これらは、和訓図会が和語に読むのに対して、略図解が漢語に読むものである。音読みすることによって、和語で意識的に読むことを回避しているともいえる。

189「無等等」「阿耨多羅三藐三菩提心」は、対応する各本文には「等きもの無等」(四十八表)「無上成等正覚の心」(四十九裏)とあって、和訓図会に通じる訓釈を施しているが、読みは音読みにとどめられている。144「須弥」は、意訳までは踏み込まず、「須弥とは、高き山の諭えにいふなり」(四十表)の意味を「ことし」で表すにとどめている。113「度脱」は、【三十三身十九説法】の「大意をもて説」(二十五表)本文中で「得度」や「帰伏」という語を出してその意味を解説しているが、それらを応用して訓読に生かすまではしていない。

以上、和訓図会の意識例との異同に着目した結果、略図解で和訓図会とは異なる意識(熟字的読みもの)が案出されたと認められる例は、わずかに「夜叉羅刹」「臥具」のみとなる。ここから察せられる本資料の訓読の特徴は、当代に普及していた一般的な訓(定訓)によって逐字的に読むことを基調とし、同一字句は同一の訓で読むという統一感のある姿勢を取っているといえそうである。

六 読みの統一性(一) 同一字句の読み

略図解の読みがどれだけ組織的に統一されたものであるかを明らかにするために、観音経に複数回(三回以上)出現する字句の読みに着目する。和訓図会との異同にも留意しながら、整理していく。

◎単一の訓に統一

衆生「40 55 70 73 185しゅじやう・6 15 35 164もろものひと・56

182 189もろびと・113おほくのひと・48よのひとーモロモロノヒ

ト

解脱「9 18 28 36たすかる・21 153まぬかる・38まぬかれるートケ

マヌカル(119トケマヌカル・18 21 28 36 38 153トケマヌカル

ル)

恭敬「41 43 45うやまふ・55くぎやう(す)ーウヤマフ」

怨賊「29ぬすびと・36あだぬすひと・148おんぞくーアタヌスビ

ト

受持「56 57 63 66うけたもつーウケタモツ」

世間「165 173 179よのなかーヨノナカ」

これらは、経文に複数回現れる同一字句に対する読みが、略図解で一つの訓に統一されているものである。「受持」と「世間」は、和訓図会でも読みが一通りであり、両本間で異同はない。

前節にも一部掲げた「衆生」は観音経中で全一四回出現する。その読みは、和訓図会では音読みも含めて五通りがあるが、略図解では「モロモロノヒト」一通りに統一されていて、両本の姿勢の違いが際立つ。では、「衆」を前接成分とする熟字にまで広げるとどうであろうか。

衆人「53もろひとーモロモロノヒト」

衆商人「37おほくのあきびとーモロモロノアキビト」

衆怨「177おほくのあだーモロモロノアタ」

衆宝珠瓔珞「119おほくのたからたまのえうらくーオホクノハウジ

ユノエウラク」

衆中「189おほくのなかーオホクノウチ」

略図解の読みは「モロモロノ」と「オホクノ」の二通りがある。和訓図会とは異なって「モロモロノ」と読んだ例からは、先の「オニドモ」と「オニ」を読み分けたのと同じく、修飾先の名詞の捉え方に差がうかがえる。177「衆怨」に対応する本文には「その怨ども」（四十五裏）とあり、可算的に捉えていることが確かめられる。また37「衆商人」は【怨賊難】をいう経文句に現れ、対応する本文には、一心称名を勧められたのに応じて「人人一同に声を発して、観世音菩薩の御名を唱ふるとき」（十六表）と、「どの人も・みな」の意味で解している。

略図解のほうが統一的であるとはいえ、同一字句は同一訓でと一律単純に当てはめているわけではないようである。

◎複数の読みが併存

国土「22 167くにぐにークニグニ」 「113くにークニ」 「29 73こくど

ー29クニグニ・73クニ」

善男子「6 33よきをのこーヨキヲノコ」 「60 73ぜんなんしーヨキ

ヲトコ」

供養「114 118くやうすークヤウス」 「50おがむークヤウス」 「58そ

なへたてまつるーソナフ」

礼拝「55 63らいはいすー55ヲガム・63ウヤマヒヲガム」 「50うや

まふーウヤマヒヲカム」

清浄「137きよきーシヤウジヤウノ」 「170清浄ーキヨクアキラカ

ニ」 「172きよらかなるーキヨキ」

これらは、同一字句に対する読みが、略図解の中でも複数の種類あるものである。両本ともに和語に読む例はほとんど異同がないことから、基本的には和訓図会の訓が踏襲されていると見てよからう。問題となるのは、和訓図会が漢語に読む例を略図解がどう和語化しているかである。

「(善)男子」のうち「ヲトコ」と読む二例は、和訓図会が漢語に読む例である。「善男子」のうち6 33 73は、今日ふつう呼びかけの語と「解釈されるが、略図解はそうは解していないようである。【三十三身十九說法】をいい起こす73は、「まづ此段は善男子と見るべし。善男子は嚮にもいふ如く、道を修め且観世音を受持たる者ゆゑ、これを得度せしむるは、仏ならでは度しがたし。簡様の善人には、即仏の身を現じて法を説、得度なさしむるとなり」（二十五表）とあって、無尽意菩薩を指す呼びかけの語とは取らず、第一の仏身に関わる語として理解しているようである。「嚮にもいふ如く」に当たる6は、「さて善男子といへるは世にいふ善人の事也。《……》ここには仏道修行の人をいひ、また観世音を信仰して念ずる人をいふと也」（五裏）とだけあって、無尽意菩薩を指すというような言及はやはりない。33も「その中に一人善男子とて、是も前にいふ如く、行ひよく且観世音を信仰のものありて、諸の商人に教へていはく」（十六表）と、一心称名を勧める商人を指すような解説をしている。残りの一例60は、【多少格量】をいう経文句「是善男子。善女人。功德多不。」で、「善女人」とともに

「六十二億恒河沙菩薩に食物以下種種の物を供養し名を称念ずる人をさす」（和訓図会／貳・九裏）語として、明らかに呼びかけ語とは異なる意味の例である。このように略図解はそもそも四例とも呼びかけの語とは解していないようなので、その意味の差が「ヲノコ」と「ヲトコ」の読み分けに関わっているとは考えにくい。これに関しては、文意といった言語的要因ではなく成立事情といった言語外的要因から捉えてみて、「ヲノコ」は和訓図会を踏襲した訓で「ヲトコ」は略図解による和語化の訓であると考えておきたい。ちなみに、「男子」と対の意を表す「女人」や「婦女」については、両本は次のように読んでいる。

女人「49をんなーヨナナ」 「60によんにんーヨナゴ」
 婦女「104つまーつま」 「105をんなーヨナナ」

和訓図会が和語に読む49 104 105は異同がないが、和訓図会が漢語に読む60「女人」は、略図解が「ヲトコ」との対で「ヨナゴ」と和語に読む。ただし、先行する49「ヨナナ」とはやはり統一させていない。

「国土」は全五箇所、前接する修飾字句と合わせて示すと次のとおりである。

三千大千国土「22くにぐにークニグニ」 「29こくどークニグニ」
 十方諸国土「167くにぐにークニグニ」
 諸国土「113くにークニ」
 国土「73こくどークニ」

「国土」においても、可算・不可算という差に基づく読み分けが認められる。29 73など、和訓図会が漢語に読んだ字句を略図解が和語化した例からは、略図解の読みの姿勢が捉えやすい。113「諸国土」は、数の多さを表す167「十方諸」や22 29「三千大千」を伴う例と同じく「クニグニ」と読めば、73を「クニ」と和語化したこととの読み分けが明解となるのだが、和訓図会と同じく「クニ」と読む。これもおそらく和訓図会

の訓を踏襲したのであろう。

類義関係にある「恭敬」「供養」「礼拝」は、相互に連続することでやや複雑な読みを形成している。

礼拝＋供養「50うやまひおがまばーウヤマヒヲカミ十クヤウセバ」
 礼拝＋供養「63らいはい十くやうするにーウヤマヒヲガミ十クヤウスルニ」

恭敬＋礼拝「55くぎやう十らいはいせばーウヤマヒヲガムコト」

熟字単位「十」で区切って考えてみた場合、50の和訓図会（「礼拝」うやまひ）「供養」おがまば」となるか）と55の略図解（「恭敬」ウヤマヒ）「礼拝」ヲガムコト」となるか）が、通常の即字的な読みからは外れているかに見える。それでも、略図解の読みは統一的といえ、50 63で「礼拝」を「ウヤマヒヲガム」と読み、「恭敬」は四例全て「ウヤマフ」と読んでいることから、55「礼拝」の「礼」は「恭敬」ウヤマフに重ねられたものと推察される。¹⁶一方、和訓図会の50「うやまひおがむ」は、他箇所の「礼拝」「供養」が漢語読みであるため字句と読みの統一的関係から推察することは難しく、特に「供養」に「おがむ」を当てることには不審が残る。¹⁷

以上、略図解の字句の読みは、和訓図会に比べると、たしかに全体的によく統一されている。なかには、参照した和訓図会の訓を踏襲したために統一性を欠いてしまったと見られるところもあるが、文脈を踏まえて適切な訓を選ぶことも怠ってはならず、〈字ー訓〉対応は和訓図会よりも整備されているといえる。ただし、「清浄」のように三箇所とも和訓図会と異同がありかつ略図解中でも読みが異なる例などもあることから、なお個別に意味を検討して慎重に分析する必要がある。

七 読みの統一性(二) 同一の構文の読み方

同一の構文や類似の表現では、どれだけ統一が図られているだろうか。観音経中で明確な三つの構文に着目する。

【三毒解脱】をいう経文は、同じ構文が連続する箇所である。両本の読みを、中世仮名延書本の代表格である妙一記念館蔵仮名書法華経の読みとも比べながら、三本並べて掲げる。

①40若有衆生。多於婬欲。41常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。

訓図 もししゆじやうあつていんよくおほからんにつねにねんじてくわんせおんぼさつをうやまひなばすなはちよくをはなることをえん (壹・廿八裏)

略図 モシモロモロノヒトアリンヨクオホクハツネニクワンゼオンボ

サツヲネンジウヤマヒナバスナハチヨクニハナルルコトヲエン (十七表)

妙一 もし衆生ありて淫欲おほからんつねに念して観世音菩薩を恭敬う

やまわはせはすなはち欲をはなることえてん (一一二九)

②42若多瞋恚。43常念恭敬。観世音菩薩。便得離瞋。

訓図 もしいかりおほからんにつねにねんじてくわんせおんぼさつをうやまはばすなはちいかりをはなることをえん (壹・廿八裏)

略図 モシイカリオホクハツネニクワンゼオンボサツヲネンジウヤマヘ

バスナハチイカリニハナルルヲエン (十七裏)

妙一 もし瞋恚(はらたつこと)おほからむつねに念して観世音菩薩

を恭敬せはすなはち瞋(はらたつこと)をはなることえてん (一一三〇)

③44若多愚痴。45常念恭敬。観世音菩薩。便得離痴。

訓図 もしかたくなおほからんつねにねんじてくわんせおんぼさつをうやまへはすなはちかたくなをはなることをえん (壹・廿八裏)

略図 モシオロカニカタクナオホクハツネニクワンゼオンボサツヲネン

ジウヤマヘバスナハチカタクナヲハナルルヲエン (十八裏)

妙一 もし愚痴おほからんつねに念して観世音菩薩を恭敬(うやまわは)せはすなはち痴(おろかなること)をはなることえてん (一一三〇)

経文句は、「多」A。常念恭敬。観世音菩薩。便得離「B」。のように構文化でき、「A」「B」は「淫欲・欲」「瞋恚・瞋」「愚痴・痴」と連続する。このうち傍線部に関わる読み(訓法)のみを文献ごとに抜き出すと、次のとおりである。

和訓図会

①	多	恭敬	得離
②	40おほからんに	41うやまひなば	41をはなることえん
③	42おほからんに	43うやまはば	43をはなることえん
④	44おほからん	45うやまへは	45をはなることえん

①	多	恭敬	得離
②	40オホクハ	41ウヤマヒナバ	41ニハナルルコトヲエン
③	42オホクハ	43ウヤマヘバ	43ニハナルルヲエン
④	44オホクハ	45ウヤマヘバ	45ヲハナルルヲエン

妙一延書	多	恭敬	得離
①	40おほからん	41くきやうせは	41をはなることえてん
②	42おほからむ	43くきやうせは	43をはなることえてん
③	44おほからん	45くきやうせは	45をはなることえてん

ちなみに、「常念恭敬観世音菩薩」箇所は、和訓図会が「つねにねんじてくわんせおんぼさつをうやまひなば」と読み、略図解が「ツネニクワンゼオンボサツヲネンジュヤマヒナバ」と読んで、両本間で返読位置に違いがある。和訓図会の返読位置は妙一延書のほか早読絵抄・倭成延書・文段経・倭点・明算点と一致し、略図解の読みが特異である。①②③の三箇所に現れる「多」「恭敬」「得離」三字句の読み方について、和訓図会と略図解との異同に留意しながら語法上気になったことを指摘しておく。

「多(おほし)」を假定条件にするかたちが、和訓図会「んに」と略図解「ハ」で異なる。助動詞「ん」を用いるほうが古くからの一般的な読み方で、妙一延書をはじめ早読絵抄・倭成延書・文段経・倭点・明算点と一致する。略図解が特異である。「恭敬(うやまふ)」を假定条件にする活用形が、和訓図会では未然形と假定形(已然形)で表されている。略図解の②③は假定形ということになる。また、両本とも①のみ確述「ぬ」を添える点が共通する。「離(はなる)」に続く格助詞が、和訓図会「を」と略図解「ニ」で異なる。語法上は二格で表すことも可能である。「得(う)」に続くかたちが、和訓図会「ことを」と略図解「準体法ヲ」で異なる。「こと得」から「ことを得」への変化は訓読史上周知の事象だが、略図解はさらに準体法化させている。

妙一延書に比べると両勸化本はともにばらつきが大きく、特に略図解は字句の読みで認められた統一度とは様相が一変している。

【三十三身十九説法】をいう経文は、74から同じ構文が計一九回繰り返される。参考までに①②の読みだけを三本並べて掲げる。

①74 応以仏身。得度者。75 観世音菩薩。即現仏身。而為説法。

【訓図】 まさはちほとけのみをもつてとくどするものにはくわんせおんぼさ

つすなはちほとけのみをあらはしてするためにほふをとく(貳・十四

裏)

【略図】 マサニホトケノミヲモツテトクドスベキモノニハクワンゼオンボ
サツスナハチホトケノミヲアラハシテタメニホフヲトク(二十五
表)

【妙一】 仏身(ほとけおんみ)をもて得度(わたすこと)すへきものには観
世音菩薩(せおんぼさつ)すなはち仏身(ほとけおんみ)を現してために法をとく
(一三三五)

②76 応以辟支仏身。得度者。77 即現辟支仏身。而為説法。

【訓図】 まさにびやくしぶつのみをもつてとくどすべきものはすなはちび
やくしぶつのみをげんじてためにほふをとく(貳・十六表)

【略図】 マサニビヤクシブツノミヲモツテトクドスベキモノニハスナハチ
ビヤクシブツノミヲアラハシテタメニホフヲトク(二十八表)

【妙一】 辟支仏の身をもて得度(わたすこと)すへきものにはすなはち辟
支仏の身(み)を現してために法をとく(一三三六)

経文句は、「応以 A 身。得度者。即現 B 身。而為説法。」のように構文化でき、「A」は「①仏74 75、②辟支仏76 77、③声聞78 79、④梵王80 81、⑤帝釈82 83、⑥自在天84 85、⑦大自在天86 87、⑧天大将军88 89、⑨毘沙門90 91、⑩小王92 93、⑪長者94 95、⑫居士96 97、⑬宰官98 99、⑭婆羅門100 101、⑮比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷身102 103、⑯長者・居士・宰官・婆羅門婦女104 婦女105、⑰童男童女106 107、⑱天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等108 之109、⑲執金剛神110 111」と連続する(⑱「之」⑲「執金剛神」には「身」なし)。このうち傍線部に関わる読み(訓法)のみを文献ごとに抜き出すと、次のとおりである(□数字は用例数、○数字は十九説法字句番号を示す)。

和訓図会

A身	得度	者	B身	現	説
のみ17	とくとすべき17	ものは17	のみ16	をけんじて18	とく16
しん14	とくとする1116	ものには115	しん13	をあらはして11	ときたまふ121415

略図解

A身	得度	者	B身	現	説
ノミ18	トクドスベキ19	モノニハ19	ノミ17	ヲアラハシテ17	トク19
			ニアラハレテ1819		

妙一延書

A身	得度	者	B身	現	説
のしん17	とくとすべき19	ものには19	のしん16	をけんじて19	とく19
しん11			しん11		

まず、和訓図会の原則的な読み方は、「まさに A のみをもつてとくどすべきものは B のみをげんじてためにほふをとく」となる。これに反する読みも散見され、特に①は例外的である。たしかに妙一延書でも①のみ「身」を「しん」と音読みして他とは異なっている。73「善男子。若有国土衆生。」から続く一文であることや、75で「観世音菩薩」という句をさし挟んでいることなど、後に連続する表現とはや異なった文構造になっていているせいかもしれない。対応する本文には「応に仏の身を以て得度すべき者はとの事なり」、「観世音即ち仏身を現じて右の者の為に説法して得度させ給ふと也」（貳・十五表）とあって、原則的な読み方に近い解釈を示していることから、②で著者の意向に沿った読み修正されていると見做せよう。また、「身」を「しん」と音読みするのは、③の後半部（B身）とそれに続く④の前半部（A身）である。「身」が字面上は連続するわけだが、文として

は切れている。構文・意味単位に対する意識が足りていない読みといえよう。敬語の読み添えの有無は、和訓図会と略図解の異同全体から導かれる特徴の一つでもあるのだが、この⑫⑭⑮の三箇所のみ添える文脈上の必然性は見出せない。むしろ、②③⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱に対応する各本文では「説給ふとなり」と敬語を添えて解説していることから、紛れ込んだかに見える敬語を添える読み方のほうが勧化という企図に適った読みといえよう。

こうした部分的に紛れ込んでいる揺れに関しては、組織的な完成度を問題とするならば、全体的な統一に対する意識の薄さということになるが、試行的・草稿的な素朴さや本意の感じられる部分でもあり、各勸化本の成立事情や制作過程を考えていくうえで興味深い。

和訓図会に対して、略図解のこの箇所を読みはかなり統一がとれている。略図解の原則的な読み方は、「マサニ A ノミヲモツテトクドスベキモノニハ B ノミヲアラハシテタメニホフヲトク」となる。

これから外れるのは、109「即皆現之」と111「即現執金剛神」のみで、①から⑱まで連続する「B身」の字が現れない箇所である。字句の細かな変化が訓の変化と結びついていて、各語句の意味的つながりを丁寧におさえて読みが選択されたことがうかがえる。

【十二難解脱】をいう偈頌は、140から「念彼観音力」を核とする同じ構文が計一三回繰り返される。参考までに②⑤の読みだけを三本並べて掲げる。

②142或漂流巨海 竜魚諸鬼難 143念彼観音力 波浪不能没

訓図 あるひはおほうみにただよひながれ りうじんうをもろもろのおにのなんも かのくわんおんのちからをねんすれば なみももつ

略図 アルヒハオホウミニタダヨヒナガレ タツウヲモロモノオニノ

することあたはず（三・十四表）

妙一延書

A	B
らんにも①③⑤⑨⑪⑫⑬ あらんにも②④⑥⑦⑧⑩	なん(なむ)①③⑥⑩⑬ てん⑤⑦⑧⑫⑬ じ②④⑨

やはり妙一延書はかなり統一のとれた読み方になっており、AとBの両方で推量の助動詞(「ん」「じ」)を添えて文全体の時制をきちんと整えている。それに比べて両働化本はばらつきが大きい。

帰結句Bのうち②④⑨は否定副詞「不」が訓読文末に来る。妙一延書の読んだ和文的な打消推量「じ」は、江戸時代の両本には採用されていない。この打消の三例を除いて考えれば、和訓図会は④までと⑤以降、略図解は⑥までと⑦以降を区切りとして、それぞれ読み方が変化しているように見える。が、この変化に意味上の必然性は見出せない。一方、条件句Aの読み方はB以上に多様で統一感がない。条件表現としては、妙一延書には見られない接続助詞「とも」を添えるかたちが最も多く、因果関係をより論理的に示す表現が採用されている。その反面、論理的には曖昧な、連用形や終止形で中止法的に提示する表現も見られる。特に略図解では、接続を細かに表すことを放棄したかのような⑤⑥⑬「：終止形／：終止形」も目立つ。

和文的表現を使いこなした妙一延書に比べると、両働化本の表現にはもの足りなさを感じないではない。訓読に用いる文法的表現が文語化していた時代に読まれた両働化本にとっては、もはや文意をくみ取りつつ活用形や付属語によって述語句末を統一することは難しかったのであるうか。

総じて、略図解の構文の読み方は、字句の読みに比べると統一感に乏しく、各語句の意味的つながりをそれぞれ個別に処理したにとどまっ

ているといえる。訓読において文語表現を駆使することの難しさもわかかわせる結果であった。

八 まとめ 和訓図会の受容と読みの方針

和訓図会と似た体裁を持つ略図解の読みの工夫の実態について、和訓図会との異同に留意しつつ調査した。その結果、次のような特徴が明らかになった。

□熟字を単字単位に分解して読む

□当代の定訓によって読む

□組織的に訓を統一して読む

□字句の訓に比べて文法的な読み添え表現の統一度は低い
これらに通底する略図解の読みの基本方針は、「できるかぎり和語化する」であるといえる。ただし、略図解の場合、和語化とは逐字的に定訓で読むことであって、積極的に意識を創り出してはいない。

和訓図会との違いに関しては、和訓図会のほうが、訓が多彩で意識や口語的な表現を取り入れていて、柔軟で闊達である。一方、略図解のほうが、定訓を主にして逐字的に読みを整備している。これは、略図解が和訓図会を参考にいわば手直ししながら読みを確定していったことを裏付けてもいよう。和訓図会の読みへの対処のしかたは、おおよそ次のように考えられる。

漢語→和語化(逐字・定訓)

逐字的和語→そのまま踏襲

別の読みに改変

意識語→逐字・定訓(一部意識のまま踏襲)

定訓によるとはいえ、同一字は同一訓でと一律単純に当てはめているわけではなく、それぞれの文意に適うように読みを選択している。その姿

勢が構文の読みでは揺れを招いた可能性がある。和訓図会を踏襲した読みと略図解で改変された読みの違いについては、さらに精査が必要である。

読みの統一に関して、文意といった言語内的な要因で説明できなかった事例を「揺れ」と見たが、成立事情や制作過程といった言語外的要因も勘案すると、その背景にはどういったことが考えられるのであろうか。場当たりに読んだのか、その都度参照した先行文献が異なったのか、そもそも著者一人の手になるようなものではなく執筆協力者がいたり手分けして作られたりしたのか。こうした例を手がかりにしつつ成立の背景にも迫れるように精査を続けたい。

〈注〉

- (1) 拙稿「経文訓読上の工夫と勸化——『観音經和訓図会』における熟字の読み方——」（『解釈』六五—一一・一二、二〇一九年二月）。以下「前稿」。
- (2) 服部穰治「松亭金水と日蓮宗——幕末期における通俗仏書の出版と戯作者——」（『仏教文学』三一、二〇〇七年三月）。ほかに、望月真澄「幕末期日蓮伝記本に関する一考察——中村経年著『日蓮聖人一代図会』における挿絵と日蓮の足跡に関わる記載事項を中心に——」（冠賢一先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史論集』山喜房佛書林、二〇一〇年一月）。
- (3) 注(2) 服部文献。早読絵抄と略図解の関係については別稿で詳しく論じたい。
- (4) 注(2) 服部文献。『日蓮聖人一代図会』の明治再版でも同様の「改竄」が見られる由、「北斎の知名度を利用し、積極的に売り込もうとしている書肆のまкруろみを伺うことができる」とされる。
- (5) 注(2) 服部文献でも、「『法華経』『普門品』の経文が都合よくねじ曲げられ、かえって悪を助長するための方便とされていることに対して、痛

烈に僧侶を批判している」例を指摘する。

- (6) 横山邦治著『読本の研究——江戸と上方と——』（風間書房、一九七四年四月）七八〇頁。
- (7) 野沢勝夫著『「仮名書き法華経」研究序説』（勉誠出版、二〇〇六年三月）二三頁、等。
- (8) 「中国語の単語は、漢字の一字または熟字として表されるから、訓読に当っては、それぞれの漢字について、日本語をどう対応させるかが基本的な方法となる。その上に、言語構造の違いを如何に融和させるかが課題となってくる」（小林芳規著『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究Ⅰ 叙述の方法』（汲古書院、二〇一一年三月）二六九頁）。
- (9) 用例の掲出は、漢字が経文字句、算用数字が分節番号、平仮名が和訓図会の読み—片仮名が略図解の読み、各訓の右肩の小文字記号(○◎◇×)が各字の定訓認定を示す。活用語は終止形に改め、適宜助動詞を下接したかたちまでを採った。
- (10) 153「釈然」（四十一表）17「乃至」（十一表）は、該当する訓釈は存しなかった。
- (11) 和訓図会の本文「慧日は智慧を日に諭し也」（三・廿三裏）、早読絵抄「慧日とは智慧の日也」（二十四表・頭注ミ）。
- (12) 「眼Ⅱめ」は、定訓認定の第三基準とした書言字考節用集と和英語林集成に掲載がある。このほか早引万代節用集には、「まなこ」は「眼」（六22）だけが、「め」は「目・眼」（六100）が載る。
- (13) 「よるのもの」という言葉自体は中古からあり、近世にも広く使われていたようだが、多く夜着のことをいったか。書言字考節用集には「ヨルノモノ」として「宿衣・睡襖・夜衣」（⑦一七2）の漢字表記例が載るが、同じような漢字表記例「夜衾・睡襖・宿襖」（六220）が早引万代節用集には「よるのきぬ」として載り、「よるのもの」は掲載がない。一方、「やぐ（夜具）」は、近世中期に生じた語のようである。和英語林集成には「YAGU, ヤ、夜具, n. Articles used in sleeping : as, bed-clothes, mattress, and pillow」(p.522)とあるほか、早引万代節用集にも「夜

- 具^ぐ」(六四四)とある。
- (14) 先行する経文句30「有一商主。将諸商人。」に「諸モロモロノ」とあって、文脈上同じ「商人」を指していることから、これに引かれた面もあるかと思われる。なお、同箇所を和訓図会本文は「右一人の者の勸を衆の商人が聞て大勢俱に南無観世音菩薩と言んとの事なり」(壹・廿六裏)と解説する。
- (15) 和訓図会は33を、「此善男子は仏道の信者といふにも非ず。俗に各方といふに同じ。」(壹・廿六表)と、呼びかけの語と取る。
- (16) 倭玉篇慶長一五年版は「礼」に「ウヤマウ・ラガム・コトワル・スガタ」(72)の訓を載せる。
- (17) 前稿では「礼拝供養」でB1②に分類しておいた。
- (18) 返読位置の異同は、字句の読み以上に経文句の解釈と結びつくことでもあり、訓読の成立・系統や依拠した訓読等を探る上でも重要となるため、別に改めて論じたい。いまは、こうした両本の返読位置に関する異同は全二〇箇所に及ぶことだけ指摘しておく。
- (19) たとえば、「われ今水に離れてせんかたなし。」(伊曾保物語・下四、大系四三五頁)。
- (20) 底本「おそれぬる」と読める。対応する本文では「怖畏ある時」(三・廿五表)と解釈する。活字版の訓読は「おそれぬる」とする。「あ」とあるべきの誤刻か。
- (21) 和訓図会⑤⑥は先に準じるとして「念彼観音力」部の延書を省略する。
- (22) 高橋宏幸「念彼観音力 衆悉退散」(『垂水』二五、一九七八年一〇月)は、明算点、足利鐔阿寺藏仮名書き法華経元徳二年写、倭点、文段経の調査に拠って、「鎌倉時代までは「彼の観音を念ぜむ力に」と訓み、南北朝時代以後「彼の観音の力を念ぜば」と訓むようになった」事実を指摘する。
- (23) 先掲の41 43 45「常念恭敬観世音菩薩」と同じく、和訓図会の返読位置は妙一延書ほか早読絵抄・倭成延書・文段経・倭点・明算点と一致する。略図解の読みが特異である。

〈調査文献〉

観音経(妙法蓮華経)

□観音経略図解(『略図解・略図』)……架蔵。中村経年著。文久二年版(改正再刻)。奥付に「原板元文四年己未正月出版」とあるが不審。底本には、裏見返に、京・大阪・江戸の三都書肆「出雲寺文治郎・河内屋喜兵衛・河内屋茂兵衛・秋田屋太右衛門・敦賀屋九兵衛・須原屋茂兵衛・須原屋伊八・岡田屋嘉七・山城屋佐兵衛・須原屋新兵衛」の名を連ねた付刊記をもつ『観音経略図解』全一冊を用いた。大きさは縦二二七×横一五六mm。鼠色唐花型押表紙。同じ刊記をもつ左記所蔵本の全文の画像が公開されている。The World of the Japanese Illustrated Book: The Gerhard Pulverer Collection. [Kannon'syo ryakuzukai 観音経略図解 Accession No. FSC-GR-780.265]。本文に掲出する経文句は123「言」126「是」を脱する。引用に際して、句読点は底本にはなく仏教文庫版に拠った。

□観音経略図解・明治補刻版……架蔵(三種)。改装と見られる表紙の題簽に「観音経和訓図会」、裏見返に「日蓮宗御経書籍製本発売所」「御用書林平楽寺村上勘兵衛」の付刊記をもつ全一冊。大きさは縦二一八×横一五二mm。ほかに、全三冊に装丁されたものもある。表紙の題簽に「観音経和訓図会」と「松亭金水撰、葛飾北斎画図」。見返(赤料紙)には、題「観音経和訓図会」を挟んで右に作者「松亭中村経年謹撰、葛飾北斎画図」、左に発行者「京都書肆花悦堂、江都書肆花悦堂、合梓」とある。一丁から十六丁、十七丁から三十二丁、三十三丁から五十一丁を分けて全三冊とし、それらをさらに綴じ合わせて一冊とする。大きさは縦二二〇×横二五一mm。丸帙有。表紙の題簽に「観音経和訓図会 下」あるいは「観音経和訓図会 中」(「中」は別筆書入)と、「松亭金水撰、葛飾北斎画図」。十七丁から三十二丁を「中」、三十三丁から五十一丁を「下」と分けて全三冊とするうちの中・下の二冊のみ。大きさは縦二二三×横一五六mm。三種の明治補刻版のうち平楽寺村上勘兵衛刊記本が最も鮮明な印刷である。訓読部分について底本との異同はない。

□観音経略図解・仏教文庫版……『絵入観音経講話』(仏教文庫編集部編、東方書院、仏教文庫21、昭和六年五月)に、松亭中村経年著・葛飾北斎画「観音経略

図解」として所収。文久二年版の奥付が載る(一〇八頁)。これによって、この本もまた先に取り上げた和訓図会と同じく、近代以降も長く大衆に受け入れられてきたものであることが分かる。掲出する経文句は、123「言」は脱するが126「是」は補われている。

□観音経和訓図会(「和訓図会・訓図」)……架蔵(二種)。底本には、三の裏見返に「嘉永二己酉年正月」(一八四九年)の日付と、江戸・京・大阪の書肆「須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛・岡田屋嘉七・丁子屋平兵衛・須原屋伊八・丸屋善兵衛・須原屋平左衛門・河内屋茂兵衛・秋田屋大右衛門」の名を連ねた付刊記をもつ『観音経和訓図会』全三冊を用いた。大きさは縦二五二×横一九九mm。口絵には「天保甲辰歳」天保一五年(一八四四)の年記が見られる(左将曹岸礼画)ほか、口絵の後にある題詞には「大綱」「皇都紫野黄梅院現住」とあり、臨濟宗大徳寺塔頭黄梅院第一四世大綱宗彦(一七七一—一八六〇)の詠歌が載る。底本以外にも、『観音経和訓図会』全五冊として、附録四に「観音経」の音読平仮名点と「観世音詠歌(観音経御詠歌略註)」(山田意斎叟述・宮田翠竹斎画)を、附録五に「観音籤三十二卦(靈感観世音籤卜考)」(隠元著・泉州厚見道純和撰)を配して一揃えとするものもある。五の巻末・裏見返に「明治廿三年五月譲受」、愛知県名古屋の書肆「梶田勘助」の刊記をもつ全五冊。大きさは縦二二七×横一五七mmで一回り小さいが、本文の内容・挿絵・字詰め・匡郭寸法(内法)は底本と等しく、後印本と見られる。所蔵者印付。

□観音経和訓図会・活字版……『観音経和訓図会全』中村風祥堂、大正一一年(一九二二年)一月、活版洋装三ツ目綴じて大きさは縦一八三×横一三〇mm。(一九二二年)一月、裏見返広告に「皇都書林 弘簡堂須磨勘兵衛梓」の付刊記をもつ全一冊を用いた。大きさは縦二二六×横一五九mm。「近世後期に至ると、用途別の分化が進み、中には往来物に類した書物まで出現する。たとえば『観音経早読絵抄』(元文四年刊)がその好例で、件の後印本には弘簡堂須磨勘兵衛の「幼童往來新大成」をはじめ、みな往来物ばかりが連ねられる。」(和田恭幸「浅井了意の仏書とその周辺(二)」——鼓吹物の変遷と怪異小説の素材源の変容

——) (『国文学研究資料館紀要』二四、一九九八年三月) などと評される。□妙一記念館蔵仮名書法華経鎌倉中期写(「妙一延書・妙一」)。中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経・影印編』(仏乃世界社、一九八八年三月)。引用に際しては、左傍注解は当該被注語の下に(一)で示す。濁声点・句切点は不問。

□倭成図書館蔵仮名書法華経(「倭成延書」)……田島毓堂編『倭成図書館蔵法華経和歌付仮名書き法華経の研究・影印編』(名古屋大学文学部日本文学日本語学研究室、一九九八年六月)。

□日遠著文段法華経慶長一七年版(「文段経」)……『日遠聖人文段経妙法蓮華経並開結』(本満寺、一九七三年一月)。

□長浜八幡宮蔵心空著倭点法華経嘉慶元年版(「倭点」)……中田祝夫編『心空版嘉慶元年刊倭点法華経』(勉誠社、一九七七年一月)。

□龍光院蔵法華経天喜頃明算点(「明算点」)……大坪併治著『訓点資料の研究』(風間書房、一九六八年六月)の解説文。

法華経訓読諸本に関しては、拙稿「法華経訓読諸本考——「得」「雨」「如是」訓法の比較——」(『名古屋大学国語国文学』八三、一九九八年二月)で基本的な情報を紹介した。

古辞書等

□倭玉篇……慶長一五年版倭玉篇(中田祝夫・北恭昭編『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引』(勉誠社、一九八一年一月)。倭玉篇諸本(中田祝夫・北恭昭著『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』(勉誠社、一九七六年三月)、北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』(汲古書院、一九九四年三・一月・一九九五年一月)。

□節用集……古本節用集(中田祝夫著『古本節用集六種研究並びに総合索引』(風間書房、一九六八年四月)、中田祝夫著『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』(勉誠社、一九七四年三月)、『天正十八年本節用集下二冊附解説』(東洋文庫、一九七一年三月)、近世節用集(中田祝夫・小林祥次郎著『書言字考節用集研究並びに索引』(勉誠社、一九七三年三月)、高梨信博編・発行『改編・早引万代節用集』全六冊、一九九八年九月(二〇一〇年四月)、宮田彦彰編、

嘉永三年刊)。『早引万代節用集』は「早引式の節用集のなかでは掲載語がもっとも多い」(松井利彦著『近代漢語辞書の成立と展開』(笠間書院、一九九〇年一月)二〇頁)などとされる。

□会玉篇大全……架蔵。毛利貞斎著『増統大広益会玉篇大全』全二冊(天保五年版)。

□和英語林集成……ヘボン編『和英語林集成』(一八六七年初版、北辰、一九六六年一〇月復刻版)

定訓に関しては、前稿に従って認定し、和訓の右肩に小文字記号(○)↓(◇)の優先順位)で示した。「○」は倭玉篇慶長一五年版に掲載のある訓、「◎」は慶長一五年版には訓または字の掲載がないが他の倭玉篇諸本には掲載のある訓、「◇」は倭玉篇慶長一五年版・諸本には掲載がないが近世末期の辞書三種(書言字考節用集、会玉篇大全、和英語林集成)のいずれかには掲載のある訓。辞書に掲載された訓との、語形変化(音韻交替・転成等)や清濁の違いは不問。

これら文献からの引用に際しては、漢字は略字・異体字を含め通行の字体に改めた。踊り字は当該の文字に改めた。引用の所在表示は、「索引」を備える各文献は「索引」の凡例に準じ架蔵版本は丁を示すことを原則にした。

〈妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五(原漢文)「比較訓読」用分節〉

*進問総答Ⅱ／1爾時無尽意菩薩。即從座起。／2偏袒右肩。合掌向仏。／3而作是言。／4「世尊。観世音菩薩。以何因縁。名観世音。」／5仏告無尽意菩薩。／6「善男子。若有無量。百千万億衆生。／7受諸苦惱。聞是観世音菩薩。一心称名。／8観世音菩薩。即時観其音声。／9皆得解脱。

*七難解脱Ⅱ／10若有持是観世音菩薩名者。／11設入大火。火不能燒。／12由是菩薩。威神力故。／13若為大水所漂。／14称其名号。即得浅处。／15若有百千万億衆生。為求金。銀。瑠璃。磲磲。碼碯。珊瑚。琥珀。真珠等宝。入於大海。／16假使黑風。吹其船舫。飄墮羅刹鬼国。／17其中若有。乃至一人。称観世音菩薩名者。／18是諸人等。皆得解脱。羅刹之難。／19以是因縁。名観世音。／20若復有人。臨当被害。称観世音菩薩名者。／21彼所執刀杖。尋段段壞。而得解脱。／22若三千大千国土。滿中夜叉羅刹。欲來惱人。／23聞其称観世音菩薩名

者。／24是諸惡鬼。尚不能以。恶眼視之。／25況復加害。／26設復有人。若有罪。若無罪。／27柙械枷鎖。檢繫其身。称観世音菩薩名者。／28皆悉斷壞。即得解脱。／29若三千大千国土。滿中怨賊。／30有一商主。將諸商人。／31齎持重宝。經過險路。／32其中一人。作是唱言。／33「諸善男子。勿得恐怖。／34汝等应当。一心称観世音菩薩名号。／35是菩薩。能以無畏。施於衆生。／36汝等若称其名者。於此怨賊。当得解脱。」／37衆商人聞。俱发声言。南無観世音菩薩。／38称其名故。即得解脱。／39無尽意。観世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。

*三毒解脱Ⅱ／40若有衆生。多於姪欲。／41常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。／42若多瞋恚。／43常念恭敬。観世音菩薩。便得離瞋。／44若多愚痴。／45常念恭敬。観世音菩薩。便得離痴。／46無尽意。観世音菩薩。有如是等。大威神力。／47多所饒益。／48是故衆生。常心念。

*二求兩願Ⅱ／49若有女人。／50設欲求男。礼拝供養。観世音菩薩。／51便生福德智慧之男。／52設欲求女。／53便生端正有相之女。宿植德本。衆人愛敬。／54無尽意。観世音菩薩。有如是力。／55若有衆生。恭敬礼拝。観世音菩薩。福不唐捐。

*総結Ⅱ／56是故衆生。皆心受持。観世音菩薩名号。／57復尽形供養。飲食。衣服。臥具。医薬。／59於汝意云何。／60是善男子。善女人。功德多不。／61無尽意言。「甚多。世尊。」／62仏言。／63「若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時。礼拝供養。／64是一人福。正等無異。／65於百千万億劫。不可窮尽。／66無尽意。受持観世音菩薩名号。／67得如是。無量無辺。福德之利。」

*三業問Ⅱ／68無尽意菩薩。白仏言。／69「世尊。観世音菩薩。云何遊此娑婆世界。／70云何而為衆生說法。／71方便之力。其事云何。」

*三十三身十九說法Ⅱ／72仏告無尽意菩薩。／73「善男子。若有国土衆生。／74心以仏身。得度者。／75観世音菩薩。即現仏身。而為說法。／76心以辟支仏身。得度者。／77即現辟支仏身。而為說法。／78心以声聞身。得度者。／79即現声聞身。而為說法。／80心以梵王身。得度者。／81即現梵王身。而為說法。／82心以帝釈身。得度者。／83即現帝釈身。而為說法。／84心以自在天身。得度者。／85

者。／24是諸惡鬼。尚不能以。恶眼視之。／25況復加害。／26設復有人。若有罪。若無罪。／27柙械枷鎖。檢繫其身。称観世音菩薩名者。／28皆悉斷壞。即得解脱。／29若三千大千国土。滿中怨賊。／30有一商主。將諸商人。／31齎持重宝。經過險路。／32其中一人。作是唱言。／33「諸善男子。勿得恐怖。／34汝等应当。一心称観世音菩薩名号。／35是菩薩。能以無畏。施於衆生。／36汝等若称其名者。於此怨賊。当得解脱。」／37衆商人聞。俱发声言。南無観世音菩薩。／38称其名故。即得解脱。／39無尽意。観世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。

*三毒解脱Ⅱ／40若有衆生。多於姪欲。／41常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。／42若多瞋恚。／43常念恭敬。観世音菩薩。便得離瞋。／44若多愚痴。／45常念恭敬。観世音菩薩。便得離痴。／46無尽意。観世音菩薩。有如是等。大威神力。／47多所饒益。／48是故衆生。常心念。

*二求兩願Ⅱ／49若有女人。／50設欲求男。礼拝供養。観世音菩薩。／51便生福德智慧之男。／52設欲求女。／53便生端正有相之女。宿植德本。衆人愛敬。／54無尽意。観世音菩薩。有如是力。／55若有衆生。恭敬礼拝。観世音菩薩。福不唐捐。

*総結Ⅱ／56是故衆生。皆心受持。観世音菩薩名号。／57復尽形供養。飲食。衣服。臥具。医薬。／59於汝意云何。／60是善男子。善女人。功德多不。／61無尽意言。「甚多。世尊。」／62仏言。／63「若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時。礼拝供養。／64是一人福。正等無異。／65於百千万億劫。不可窮尽。／66無尽意。受持観世音菩薩名号。／67得如是。無量無辺。福德之利。」

*三業問Ⅱ／68無尽意菩薩。白仏言。／69「世尊。観世音菩薩。云何遊此娑婆世界。／70云何而為衆生說法。／71方便之力。其事云何。」

*三十三身十九說法Ⅱ／72仏告無尽意菩薩。／73「善男子。若有国土衆生。／74心以仏身。得度者。／75観世音菩薩。即現仏身。而為說法。／76心以辟支仏身。得度者。／77即現辟支仏身。而為說法。／78心以声聞身。得度者。／79即現声聞身。而為說法。／80心以梵王身。得度者。／81即現梵王身。而為說法。／82心以帝釈身。得度者。／83即現帝釈身。而為說法。／84心以自在天身。得度者。／85

者。／24是諸惡鬼。尚不能以。恶眼視之。／25況復加害。／26設復有人。若有罪。若無罪。／27柙械枷鎖。檢繫其身。称観世音菩薩名者。／28皆悉斷壞。即得解脱。／29若三千大千国土。滿中怨賊。／30有一商主。將諸商人。／31齎持重宝。經過險路。／32其中一人。作是唱言。／33「諸善男子。勿得恐怖。／34汝等应当。一心称観世音菩薩名号。／35是菩薩。能以無畏。施於衆生。／36汝等若称其名者。於此怨賊。当得解脱。」／37衆商人聞。俱发声言。南無観世音菩薩。／38称其名故。即得解脱。／39無尽意。観世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。

*三毒解脱Ⅱ／40若有衆生。多於姪欲。／41常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。／42若多瞋恚。／43常念恭敬。観世音菩薩。便得離瞋。／44若多愚痴。／45常念恭敬。観世音菩薩。便得離痴。／46無尽意。観世音菩薩。有如是等。大威神力。／47多所饒益。／48是故衆生。常心念。

*二求兩願Ⅱ／49若有女人。／50設欲求男。礼拝供養。観世音菩薩。／51便生福德智慧之男。／52設欲求女。／53便生端正有相之女。宿植德本。衆人愛敬。／54無尽意。観世音菩薩。有如是力。／55若有衆生。恭敬礼拝。観世音菩薩。福不唐捐。

*総結Ⅱ／56是故衆生。皆心受持。観世音菩薩名号。／57復尽形供養。飲食。衣服。臥具。医薬。／59於汝意云何。／60是善男子。善女人。功德多不。／61無尽意言。「甚多。世尊。」／62仏言。／63「若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時。礼拝供養。／64是一人福。正等無異。／65於百千万億劫。不可窮尽。／66無尽意。受持観世音菩薩名号。／67得如是。無量無辺。福德之利。」

*三業問Ⅱ／68無尽意菩薩。白仏言。／69「世尊。観世音菩薩。云何遊此娑婆世界。／70云何而為衆生說法。／71方便之力。其事云何。」

*三十三身十九說法Ⅱ／72仏告無尽意菩薩。／73「善男子。若有国土衆生。／74心以仏身。得度者。／75観世音菩薩。即現仏身。而為說法。／76心以辟支仏身。得度者。／77即現辟支仏身。而為說法。／78心以声聞身。得度者。／79即現声聞身。而為說法。／80心以梵王身。得度者。／81即現梵王身。而為說法。／82心以帝釈身。得度者。／83即現帝釈身。而為說法。／84心以自在天身。得度者。／85

者。／24是諸惡鬼。尚不能以。恶眼視之。／25況復加害。／26設復有人。若有罪。若無罪。／27柙械枷鎖。檢繫其身。称観世音菩薩名者。／28皆悉斷壞。即得解脱。／29若三千大千国土。滿中怨賊。／30有一商主。將諸商人。／31齎持重宝。經過險路。／32其中一人。作是唱言。／33「諸善男子。勿得恐怖。／34汝等应当。一心称観世音菩薩名号。／35是菩薩。能以無畏。施於衆生。／36汝等若称其名者。於此怨賊。当得解脱。」／37衆商人聞。俱发声言。南無観世音菩薩。／38称其名故。即得解脱。／39無尽意。観世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。

*三毒解脱Ⅱ／40若有衆生。多於姪欲。／41常念恭敬。観世音菩薩。便得離欲。／42若多瞋恚。／43常念恭敬。観世音菩薩。便得離瞋。／44若多愚痴。／45常念恭敬。観世音菩薩。便得離痴。／46無尽意。観世音菩薩。有如是等。大威神力。／47多所饒益。／48是故衆生。常心念。

*二求兩願Ⅱ／49若有女人。／50設欲求男。礼拝供養。観世音菩薩。／51便生福德智慧之男。／52設欲求女。／53便生端正有相之女。宿植德本。衆人愛敬。／54無尽意。観世音菩薩。有如是力。／55若有衆生。恭敬礼拝。観世音菩薩。福不唐捐。

*総結Ⅱ／56是故衆生。皆心受持。観世音菩薩名号。／57復尽形供養。飲食。衣服。臥具。医薬。／59於汝意云何。／60是善男子。善女人。功德多不。／61無尽意言。「甚多。世尊。」／62仏言。／63「若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時。礼拝供養。／64是一人福。正等無異。／65於百千万億劫。不可窮尽。／66無尽意。受持観世音菩薩名号。／67得如是。無量無辺。福德之利。」

*三業問Ⅱ／68無尽意菩薩。白仏言。／69「世尊。観世音菩薩。云何遊此娑婆世界。／70云何而為衆生說法。／71方便之力。其事云何。」

即現自在天身。而為說法。／86 應以自在天身。得度者。／87 即現大自在天身。而為說法。／88 應以天大將軍身。得度者。／89 即現天大將軍身。而為說法。／90 應以毘沙門身。得度者。／91 即現毘沙門身。而為說法。／92 應以小王身。得度者。／93 即現小王身。而為說法。／94 應以長者身。得度者。／95 即現長者身。而為說法。／96 應以居士身。得度者。／97 即現居士身。而為說法。／98 應以宰官身。得度者。／99 即現宰官身。而為說法。／100 應以婆羅門身。得度者。／101 即現婆羅門身。而為說法。／102 應以比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷身。得度者。／103 即現比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷身。而為說法。／104 應以長者。居士。宰官。婆羅門婦女身。得度者。／105 即現婦女身。而為說法。／106 應以童男童女身。得度者。／107 即現童男童女身。而為說法。／108 應以天。竜。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等身。得度者。／109 即皆現之。而為說法。／110 應以執金剛神。得度者。／111 即現執金剛神。而為說法。／112 無盡意。是觀世音菩薩。成就如是功德。／113 以種種形。遊諸国土。度脫衆生。

* 勤持供養 〓 114 是故汝等。應當一心。供養觀世音菩薩。／115 是觀世音菩薩摩訶薩。於怖畏急難之中。能施無畏。／116 是故此娑婆世界。皆号之為。施無畏者。／117 無盡意菩薩。白仏言。／118 「世尊。我今當供養。觀世音菩薩。」／119 即解頸。衆宝珠瓔珞。價值百千兩金。／120 而以与之。作是言。／121 「仁者。受此法施。珍宝瓔珞。」／122 時觀世音菩薩。不肯受之。／123 無盡意。復白觀世音菩薩言。／124 「仁者。愍我等故。受此瓔珞。」／125 爾時仏告。觀世音菩薩。／126 「當愍此無盡意菩薩。及四衆。天。竜。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等故。受是瓔珞。／127 即時觀世音菩薩。愍諸四衆。及於天。竜。人非人等。／128 受其瓔珞。分作二分。／129 一分奉釈迦牟尼仏。一分奉多宝仏塔。

* 總結 〓 130 「無盡意。觀世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。」

* 偈頌・進問綰答 〓 131 爾時無盡意菩薩。以偈問曰。／132 「世尊妙相具。我今重問彼。／133 「仏子何因縁。名為觀世音」／134 具足妙相尊。偈答無盡意。／135 「汝聽觀音行。善応諸方所。／136 弘誓深如海。歷劫不思議。／137 侍多千億仏。發大清淨願。／138 我為汝略説。聞名及見身。／139 心心空過。能滅諸有苦。

* 偈頌・十二難解脱 〓 140 假使興害意。推落大火坑。／141 念彼觀音力。火坑變成池。／142 或漂流巨海。竜魚諸鬼難。／143 念彼觀音力。波浪不能没。／144 或在須弥

峰。為人所推墮。／145 念彼觀音力。如日虚空住。／146 或被惡人逐。墮落金剛山。／147 念彼觀音力。不能損一毛。／148 或值怨賊繞。各執刀加害。／149 念彼觀音力。咸即起慈心。／150 或遭王難苦。臨刑欲壽終。／151 念彼觀音力。刀尋段段壞。／152 或囚禁枷鎖。手足被杻械。／153 念彼觀音力。釈然得解脱。／154 呪詛諸毒藥。所欲害身者。／155 念彼觀音力。還著於本人。／156 或遇惡羅刹。毒竜諸鬼等。／157 念彼觀音力。時悉不敢害。／158 若惡獸圍繞。利牙爪可怖。／159 念彼觀音力。疾走無辺方。／160 蛇蝎及蝮蠍。氣毒煙火燃。／161 念彼觀音力。尋声自廻去。／162 雲雷鼓掣電。降雹澍大雨。／163 念彼觀音力。応時得消散。

* 偈頌・三毒解脱 〓 164 衆生被困厄。無量苦逼身。／165 觀音妙智力。能救世間苦。／166 具足神通力。廣修智方便。／167 十方諸国土。無刹不現身。

* 偈頌・三業 〓 168 種種諸惡趣。地獄鬼畜生。／169 生老病死苦。以漸悉令滅。／170 真觀清淨觀。廣大智慧觀。／171 悲觀及慈觀。常願常瞻仰。／172 無垢清淨光。慧日破諸闇。／173 能伏災風火。普明照世間。／174 悲体戒雷震。慈意妙大雲。／175 澍甘露法雨。滅除煩惱焰。／176 淨訟經官処。怖畏軍陣中。／177 念彼觀音力。衆怨悉退散。

* 偈頌・勤持供養 〓 178 妙音觀世音。梵音海潮音。／179 勝彼世間音。是故須常念。／180 念念勿生疑。觀世音淨聖。／181 於苦惱死厄。能為作依怙。／182 具一切功德。慈眼視衆生。／183 福聚海無量。是故頂禮。」

* 持地歎德 〓 184 爾時持地菩薩。即從座起。前白仏言。／185 「世尊。若有衆生。聞是觀世音菩薩品。／186 自在之業。普門示現。神通力者。／187 当知是人。功德不少。」

* 總結 〓 188 仏説是普門品時。／189 衆中八万四千衆生。皆發無等等。阿耨多羅三藐三菩提心。

段落(*)は、和訓図会の本文記述を主な参考にして便宜的に設けたものであり、特定宗派の教義に則ったものではない。「比較訓読」の単位として「分節」を設定して悉皆的に調査することは、拙稿「漢文訓読文の比較研究にむけて——法華経訓読諸本八本・囑累品の比較訓読文——」（『名古屋大学人文科学研究』二八、一九九九年三月）で試みた。

